

6世紀中葉（泗泚期百濟）以後の 韓国榮山江流域

佐川 正敏（東北学院大学）・崔 英姫（韓国国立江陵原州大学校）

1. 榮山江流域は周縁域か

東北学院大学アジア流域文化研究所の谷口満所長と同博物館の辻秀人館長が、国際シンポジウム『日中韓周縁域史研究ことはじめ』（東北学院大学アジア流域文化研究所・博物館共催）における「朝鮮（韓）半島の周縁域史」に関する講演者の選定と仲介を、佐川に依頼した。まず、シンポジウムのテーマである「周縁域」にふさわしい地域について考え、榮山江流域（韓国全羅南道）と中（国）原（忠清北道忠州市）がすぐに頭に浮かんだ。前者は、主体部が大型甕棺墓で墳丘を同位置で増築していく多葬という地域独特の埋葬法を400年にわたって中核としながら、北方の百濟の威信財や東方の伽耶諸国の土器、さらに倭国と関連する前方後円墳が分布するというユニークな状況が確認されているからである。また後者は、百濟・高句麗・新羅が鉄鉱石と鉄器生産で有名な中原をめぐる激しい争奪戦を繰り返し、占領・支配国の文化的特色が重複、重層して残されているからである。

ところで、周縁域という用語は、中心対辺境という解釈を有する地域的な枠を嵌め込んでしまう懸念がある。榮山江流域は、6世紀中葉に百濟に本格的に支配されるまで、明確な国家を成立させていたか否かは不明であるにせよ、百濟・伽耶・倭の諸国のいずれからも支配されずに互恵関係を保持した特別な地域であった。したがって、地理的に見れば、百濟・伽耶・倭の諸国の周縁域が重複したような見方が可能と思われるかもしれないが、それは各国の視点によるものであって、榮山江流域の地域性や独自性を無視しかねない。榮山江流域は、百濟に支配されたことによって、国家という枠組み上、確かに周縁域になったが、その地域性や独自性は温存され、それは新羅統一以後も存続していたのである。

一方で中原は、三国の断続的な占領と支配を受け、そのたびに一見異国の周縁域となったが、中原は漢城期百濟の段階からすでに南漢江を通して漢城（ソウル市）地域と密接な結びつきがあった。新羅統一以後は五小京のひとつ中原京という重要な中核都市となったが、それは鉄器生産の要素だけではなく、中原で三国時代に培われた南漢江の水運や首都・金城（慶州市）との陸運の重要性から見て、中原京が半島の交通の要衝であったことと不可分であろう。このように他国の周縁域の問題を考えようとする際には、隣接地域という

柔軟なとらえ方をしつつも、国家の成立と興亡の複雑さや多様性に十分配慮しなければならないと考える。

さて今回は、その周縁域にある複数の国家との互惠関係を有した栄山江流域の古代文化の近年の研究成果について報告してもらうことにした。その理由のひとつは、2003～2007年に本学において実施された文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業『アジア流域文化研究』（研究代表者：東北学院大学教授（現名誉教授）細谷良夫氏）の一環として開催され、辻秀人氏が後に『百済と倭国』という一書にまとめた日韓シンポジウムの諸報告において、栄山江流域の調査・研究成果が多く含まれていたという経緯があるからである（辻編著 2008）。もうひとつの理由は、佐川が2012年8月31日まで一年間、栄山江中流域に位置する全羅南道光州広域市（仙台市と友好姉妹都市）にある朝鮮大学校で研究をする機会を得たことに関係する。この栄山江はすぐ西の羅州市を経て、河口のある木浦市で海に注ぐ。

伏岩里3号墳の発掘を契機に設置された国立羅州文化財研究所は、伏岩里遺跡の鉄器製作跡や木簡、そして五良洞窯跡と大型甕棺の調査・研究で大きな成果をあげてきた。とくに、伏岩里遺跡における泗泚期百済段階の木簡と大型甕棺を焼成した五良洞窯跡は、先の日韓シンポジウム後に発見、あるいは報告されたものである。佐川も伏岩里遺跡の木簡出土1号竪穴で共伴した瓦を調査するために、2012年7月に同研究所を訪問したが、その時の所長が金容民氏であった。氏は全羅南道宝城郡の出身であり、国立扶餘文化財研究所と国立伽耶文化財研究所の所長も歴任しており、栄山江流域の周縁諸国の古代文化を熟知しているので、今回のシンポジウム『日中韓周縁域史研究ことはじめ』における講演を2012年10月に依頼し、快諾を得ることができた。そして、「栄山江流域の最近の考古学的調査の成果について」という論文を拝受したが、諸般の事情で本学へお出で頂くことができなかつたので、紙上発表という形になった。なお、論文の日本語訳（以下、金容民論文）は、本誌に掲載してある。

さて、金容民論文では主として、百済によって本格的に支配される以前の6世紀前半までの栄山江流域の古代文化を特徴づける多様な大型甕棺墓の変遷と、甕棺を焼成した五良洞窯跡の新発見を契機とする大型甕棺の実験考古学的研究について詳細な研究成果と今後の展望が報告され、そして依然として栄山江流域とその周辺に限定された前方後円墳（金容民論文では前方後円形墳）の分布に関する多岐にわたる解釈について現状認識が示された。ここでは、百済によって本格的に支配され、大型甕棺墓も前方後円墳も衰退・消滅した6世紀後半からの栄山江流域について、金容民論文でも紹介された伏岩里遺跡1号竪穴出土の木簡の意義と栄山江流域に百済寺院がなかったというふたつの側面から、若干の考察を行うことにする。

2. 伏岩里遺跡出土木簡の意義

(1) 伏岩里遺跡の木簡と百済の地方官庁の存在

国立羅州文化財研究所は、伏岩里古墳群を築造した勢力の生活遺跡を確認することを目的として、2006年から発掘調査を実施した。その結果、古墳群の東辺において伏岩里3号墳(国立羅州文化財研究所2006)築造終了間際かその直後の製鉄遺構と文字関連遺物(木簡、銘文土器、陶硯)が、益山以南の全羅南・北道ではじめて発見され、6世紀後半～7世紀の栄山江流域を通して従来不明であった泗泚期百済の地方支配体制の実状が見え始めている(金聖範2009a、同2009b、国立羅州文化財研究所2010、金容民論文)。

木簡は、1号竪穴が埋まりかけた途中に堆積した埋土2層に限定して出土している。木簡の年代を直接示す大きな手掛かりは、「庚午年」銘の墨書であり、共伴土器の年代観によって、610年(百済武王11年)とするのが合理的であると考えられている。また、そこから共伴した種子と籠、植物の枝や樹皮直下の木炭片の¹⁴C較正年代は、おおむね6世紀末～7世紀前半である。1号竪穴の南西側などから出土した9点の陶硯の年代観が7世紀前葉であることも、木簡の使用・廃棄年代と矛盾しない。

その種類には、文書木簡(封緘木簡を含む)と荷札木簡、習書木簡が含まれており、同時期の陶硯の存在からも、この1号竪穴の付近で文書行政が行われ、その行政官庁が存在したことを暗示している。官庁の存在を示す木簡には、「徳率」などの百済の官職名を記したものがある。また、「官内用」という篋描き土器の存在も、官庁の存在を示すものである。また、「豆脰舎」の篋描き土器の存在は、伏岩里遺跡一帯が百済の豆脰県(統一新羅の会津県)であり、その中心的官庁が設置されていたと推定されている。その官庁の遺構は、残念ながらいまだに発見されていないが、その存在は以上の各種の証拠から見て疑う余地がないので、発見も時間の問題であろう。

(2) 期待される伏岩里古墳群を築造した在地勢力の居館の発見

1号竪穴のすぐ西側にある伏岩里3号墳の6世紀後半の第5、16号横穴式石室墓からは、百済の官位制を示す銀製冠飾などが副葬されているので、伏岩里古墳群を築造してきた在地勢力(首長)が、百済の政治体制に組み込まれていたことが推定されている(国立羅州文化財研究所2006)。前述したように、付近には地方官庁の遺構が埋蔵されているはずであり、そればかりではなく、400年に渡って伏岩里一帯を支配してきた在地勢力の居館や関連施設も、必ずや埋蔵されていると推定される。百済の貴重な地方官庁の遺構とともに、在庁官人となる以前の彼らの居館跡が発見されることにも期待したい。

それによって、栄山江流域が周縁諸国との戦略的互惠関係を保持していた段階から、百済の周縁域、ひいては統一新羅の周縁域になっていく過程も、より鮮明に把握できるであろう。

3. 柴山江流域で百濟寺院が確認されない理由

(1) 飛鳥寺の瓦博士は首都・泗泚から渡来した

百濟では、熊津（公州市）期になると明確な仏教寺院が建設され、たとえば大通寺跡が残されている。泗泚期になると、首都・泗泚と一時遷都した可能性のある王宮里遺跡（益山市）の周辺に、定林寺や陵山里廢寺、王興寺、帝積寺、弥勒寺などの王立寺院を含む多くの寺院が建設され、それらの寺院跡では国立扶餘博物館と国立扶餘文化財研究所によって発掘調査が行われてきた（関連文献は佐川 2010 を参照）。それによって、百濟の首都周辺の寺院伽藍配置は、例外なく一塔一金堂式（日本では四天王寺式、韓国では定林寺式などの呼称もある）であったことが解明された。また、泗泚では陵山里廢寺木塔跡から 567 年銘の舍利石龕が、また王興寺木塔跡から 577 年銘の舍利容器が発見され、さらに益山では弥勒寺西石塔から舍利奉安の縁起を刻した 639 年銘の金板が発見され、寺院建設の変遷や舍利奉安形式の編年も明らかにされつつある（佐川 2010）。

百濟の威徳王（昌王）は倭国へ舍利を送り、また飛鳥寺の建設にあたっては百濟から瓦博士や鑪盤博士などの技術者を招聘したことは、日本書紀と元興寺縁起に記述されている。とくに、瓦博士の強い関与については、発掘調査によって出土した素弁蓮華文軒丸瓦の文様と製作技術、焼成された窯の構造（地下式登窯）からも明かである（奈良国立文化財研究所 1958）。飛鳥寺の創建用素弁蓮華文には、ハート形の花組（I 型式）と弁端点珠の星組（III 型式）があり、花組は広端を楔形に加工した行基（無段）式丸瓦を瓦当裏面に差し込むように接合し、星組は広端を片ほぞ形に加工した玉縁（有段）式丸瓦を接合していた。また、星組の範型は外形が円形であり、それは丸瓦の接合角度が瓦当文様との関係でまとまりをもたないことから確認され、回転台で同心円ナデを施した痕跡が瓦当裏面に残されている。一方、花組の範型が方形であることは、丸瓦の接合角度が瓦当文様との関係で 45 度ごとのまとまりをもつことから確認されている。両者はともに粘土板巻き作りで成形されている。そして、花組の軒丸瓦の点数は 30% と主体を占め、星組の軒丸瓦の点数は 11% で花組に準ずる。こうして、百濟からは花組の軒丸瓦の工人グループと星組の工人グループが、相前後して渡来していたらしいことがわかる。

近年、泗泚周辺の百濟寺院跡で出土した瓦の研究が進展している（国立扶餘文化財研究所 2011）。王興寺跡から出土した花組と星組の軒丸瓦を分析し、飛鳥寺の両者と比較した結果、両寺院における花組と星組の技術的特徴が、花組の軒丸瓦の丸瓦広端の加工の差を除けば、非常によく類似していることが報告されている（パク 2011）。佐川も崔もそのことを 2012 年に確認した。この成果は、泗泚周辺の他の寺院に普遍的にあてはまるものではないことも事実であり、したがって、飛鳥寺の瓦作りにあたっては、王興寺の造瓦工人に近い系統の泗泚周辺の二グループの瓦工人が関与していた可能性が高いといえる。

(2) 栄山江流域も含めて百濟の地方寺院の実態は不明

韓国側の百濟瓦の研究が進展するまでは、飛鳥寺へ派遣された瓦博士と造瓦工人グループが、百濟のどこで本来活動していたのか、首都の一流の造瓦工人グループではなく地方の工人グループが派遣されたのかもしれない、という想像をめぐらすことがしばしばあった。しかし、泗泚期の百濟の地方で仏教寺院跡や関連瓦の分布が、従来どれだけ確認されてきたかといえ、ほとんど不明であるか、場合によっては「なかった地域があったかもしれない」というのが実状であり、これはわれわれにとっても大きな驚きである。おそらく、日本の研究者も意外に思うであろう。それは、律令国家形成期の7世紀後半においては国ごとに一つや二つの寺院が建設され、8世紀初頭からは陸奥国という辺境、たとえば蝦夷の抵抗が強かった宮城県大崎平野においても、郡家とともに郡寺の建設が急ピッチで進められていたからであり、それは発掘調査や当該期の軒瓦の分布状況から明瞭に指摘できる（佐川 2012）。

百濟における地方支配が進行し、6世紀中葉からは県レベルの官衙の建設がしだいに展開していたことは、伏岩里遺跡の1号竪穴で出土した木簡から十分想定可能なことであり、それは前節ですでに述べた。この木簡土坑やその周辺からは、同時期の軒丸瓦の中房部分の破片1点と丸・平瓦の破片が多数出土しており、これが泗泚系統の瓦分布の南限である（国立羅州文化財研究所 2010）。丸・平瓦には厚手品と薄手品があるので、大型品と小型品の差が反映していると推定される。そして、これらが付近に官衙の存在を暗示する木簡とともに出土していることから、未知の官衙の建物の屋根に葺かれたものと推定される。しかし、栄山江流域においてはほかに泗泚系統の瓦が散布している遺跡はなく、順天市剣丹山城などの丸・平瓦は山城特有の在地系統のものであるので、栄山江流域とその周辺に当該期の寺院があった可能性はきわめて低いといえよう。

伏岩里遺跡より北の全羅北道金堤市に位置するが、泗泚期の百濟領内において当該期の蓮華文軒丸瓦（弁端点珠の星組で行基式丸瓦を接合、粘土紐巻き技法）と丸・平瓦が比較的まとまって発見されたのが、長華洞遺跡の2基の瓦窯跡とそれに隣接する瓦積み遺構である（財団法人全北文化財研究院・益山地方国道管理庁 2011）。これは武王が7世紀前葉に遷都した可能性のある益山・王宮里遺跡から南の全羅北道内においては、唯一の重要な発見である。おそらく、付近に供給地である官衙か寺院があったと推定されるので、その実態の追究は今後の大きな課題であり、期待でもある。

(3) 栄山江流域で寺院建設が遅れた原因

しかし、道路整備を含む各種の公共事業が展開しても、全羅北・南道の益山より南における百濟寺院の存在については、依然として不明な部分が多く、栄山江流域に至ってはなかった可能性が高い。韓国の研究者にその原因について尋ねたところ、この地域にシャーマニズムの伝統が根強く残っていて、仏教を受け入れなかったことが原因かもしれない、

という答えが返ってきた。しかし、伏岩里3号墳をはじめとする多くの古墳の発掘調査において、シャーマニズムの存在を裏付ける副葬品が発見されたという情報を知らない。栄山江流域で仏教を受け入れなかったシャーマニズム以外の他の思想・信仰的原因もあった可能性がある。それが伏岩里遺跡1号堅穴で木簡とともに出土した太極文様を墨で描いた木製品である。これを道教との関係で理解する案もある（国立羅州文化財研究所2010）。

栄山江流域を含む全羅南道で明確な仏教寺院が建設されたのは、統一新羅時代も9世紀になってからのことである。新羅は唐から禅宗を導入し、九山という中核寺院を全国9ヶ所に建設し、全羅南道長興郡にも宝林寺を、谷城郡にも泰安寺を、全羅北道南原市にも実相寺を建設した。このほかにも統一新羅時代末から高麗時代初期とされる石塔が全羅南・北道各地に残されているので、寺院建設活動がようやく活発化したのである。栄山江流域を含む全羅南道では、統一新羅時代になっても150年近く仏教を受け入れない在地の伝統的な思想・信仰が根強く存在したようである。

このような状況は、栄山江流域で例外的に認められるような現象ではなかったようである。6世紀前葉の新羅の碑文（浦項冷水里新羅碑など）には、中央政府や王が行政的な判決を行った後にシャーマニズム的な祭祀を行ったことが記述されている。それが6世紀中葉の真興王巡狩碑の碑文（摩雲嶺碑など）では、王の巡幸に僧が従い、その後ろに祭祀担当官が続いたことが記録されているからである（国立中央博物館2011）。仏教浸透・定着以前の各国の王室儀礼の実態と各地方の信仰の実態、そして仏教導入の過程についても、文献資料と考古学的資料によって考察する必要がある。とくに、地方への仏教導入の過程を追究することは、東アジア的に見ても重要な意義がある。

4. 律令国家形成期の陸奥国に照らして

栄山江流域が周縁諸国家と戦略的互惠関係を保持していた段階（大型甕棺墓や前方後円形墳があった6世紀前葉まで）から、百濟の地方行政官庁が明確に設置された段階（6世紀末～7世紀前半）までの間の当該地域についても、強い関心もたれる。百濟が、3号墳を含む伏岩里古墳群を約400年に渡って築造し続けた栄山江流域の有力な在地政治勢力とその居館を含む統治機構の所在地を、新たな政治体制における地方行政官庁の治所としたことは間違いのないところである。それに類似した状況は、律令国家形成期である7世紀中葉～8世紀初頭の陸奥国でも確認できる。

当時の陸奥国であった福島県内（正確には阿武隈川以南）の旧在地勢力である国造が評制と後の郡制に再編されていく過程は、磐城郡家跡と白河郡家跡と目される根岸遺跡と関和久遺跡の付近で発見された豪族居館跡と前方後円墳などの大型古墳、そして郡家跡と郡寺跡、さらには上円下方墳（野地久保古墳）の存在から明らかにされている（佐川2012）。しかし、宮城県大崎平野をおおむね北限（正確には岩手県胆沢平野の角塚古墳が

北端)とする前方後円墳をかつて築造した宮城県南部と中部の勢力は、国造制には組み込まれていなかった。かれらの7世紀後半や8世紀前葉の建郡段階における位置づけについても、栄山江流域の百濟化とだぶって見えてくるところがあるように思う。しかし、郡レベルまで仏教寺院を建設していく鎮護国家思想に基づく倭国中央政府の地域支配の徹底振りは、栄山江流域ではまったく認められない点であり、在地の思想・信仰を尊重した政策が採用されていたことが推定される。

そして、8世紀以後の陸奥国と出羽国における版図拡大戦略に伴い、長期間にわたる蝦夷勢力との抗争が存続した点も、栄山江流域では認められない。高句麗と新羅との激しい戦争に明け暮れた6~7世紀の百濟が、先の思想・信仰の尊重とともに、栄山江流域に対して柔軟な政治戦略を展開していたことを示すものであろう。この点について、今回はじめて古代陸奥国（多賀城跡から胆沢城跡まで）の諸遺跡を踏査した崔は、非常に強い、しかも新鮮な印象を抱いたという。崔は現在、京都大学大学院文学研究科の吉井秀夫教授の指導を受けながら博士論文を執筆中であるが、崔が得た新たな日本古代史の知見、とくに「周縁域史」の多様性を認識し、そのような視点での研究を韓国でも実践され、さらに韓国の多くの研究者に流布されることを期待したい。

参 考 文 献

- 金聖範 2009a 「羅州伏岩里遺跡出土百濟木簡とその他の文字関連遺物」『百濟学報』創刊号、韓国・百濟学会
- 金聖範 2009b 「羅州伏岩里遺跡出土百濟木簡」『學術會議「古代の木簡、そして山城」発表要旨』国立伽耶文化財研究所・国立扶餘文化財研究所
- 国立中央博物館 2011 『文字、それ以後（韓国古代文字展）』
- 国立扶餘文化財研究所 2011 『瓦 百濟泗泚期瓦研究 III』（国立扶餘文化財研究所學術研究叢書第60輯）
- 国立羅州文化財研究所 2006 『羅州伏岩里三号墳』
- 国立羅州文化財研究所 2010 『羅州伏岩里遺跡 I—1~3次発掘調査報告書一』
- 財団法人全北文化財研究院・益山地方国道管理庁 2011 『金堤 長華洞遺跡』（遺跡調査報告第58冊）
- 佐川正敏 2010 「飛鳥寺木塔心礎考」『坪井清足先生卒寿記念論文集—埋文行政と研究のはざままで—』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
- 佐川正敏 2012 「寺院と瓦生産からみた律令国家形成期の陸奥国」『古代社会と地域間交流 II—寺院・官衙・瓦からみた関東と東北一』（国士館大学考古学研究会編）、六一書房
- 辻 秀人編著 2008 『百濟と倭国』高志書院
- 奈良国立文化財研究所 1958 『飛鳥寺発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所学報第5冊）
- パク・ウォンジ 2011 『瓦 百濟泗泚期瓦研究 III』国立扶餘文化財研究所